

NCGM メディアセミナー

日時：2014年5月29日(木) 16時～17時

会場：国立国際医療研究センター 国際医療協力研修センター 5階大会議室

●今回の話題

話題1 「西アフリカのエボラ出血熱ウイルス アウトブレイク」

話題2 「日本の医療機関における新興感染症への備え」

●話題提供者

話題1 加藤康幸 国際感染症対策室 室長

話題2 大曲貴夫 国際感染症センター センター長

<NCGM メディアセミナーとは？>

当センターが取り組む健康・医療の課題をメディア関係者に広く共有するために開催しています。

専門家からの情報収集、不明事項の確認の場、また、医療に関わる専門家がメディアの方の質問から学び、視野を広げる場とすることが目的です。

今後も定期的に開催する予定ですので、報道機関の皆様のご参加をお待ちしております。

●セミナー内容

話題1 「西アフリカのエボラ出血熱ウイルス アウトブレイク」：加藤康幸室長

① エボラ出血熱について

- ・1976年のスーダン・ザイールにおける感染事例

スーダンでは284名が熱性疾患を発症し、151名が死亡した。その2か月後にはザイールでも318名が熱性疾患を発症し、280名が死亡した。

- ・フィロウイルスの分類
- ・エボラウイルスの生態学（動物間流行性について）
- ・臨床経過

患者の血液・体液との直接接触が主な感染経路であり、「患者のケアをする」、「遺体を清潔にする」などのような対策が必要となる。有効な抗ウイルス薬は無い。

- ・2014年までのアフリカにおけるエボラ出血熱等の流行

- ・嘔吐・下痢症状

多くの患者で、出血症状よりも嘔吐や水様下痢が認められる。
今回の流行初期にもラッサ熱とコレラの合併と考えられた。
治療では補液が重要と考えられる。

② 2014年西アフリカにおけるエボラ出血熱のアウトブレイク

- ・2013年12月～2014年5月における西アフリカでのエボラ出血熱のアウトブレイク
2013年12月以降、西アフリカのギニア・リベリアなどにおいてエボラ出血熱の集団感染が報告されている。
- ・2012年にはウガンダ、本年2014年にはリベリアにおいて調査を行った。
- ・ギニア国境にあるフォヤ・ボルマ病院では院内感染事例の調査、リベリア保健省などでは疑い例発生時の準備や中長期の院内感染防止策についての検討を行った。

③ 国内輸入症例への備え

- ・エボラ出血熱に関する国家特別委員会の役割
- ・流行を抑えるためには、患者の早期発見と個別診療（隔離）、接触者の把握と健康調査（検疫）などの対策が必要となる。
- ・フォヤ・ボルマ病院における院内感染にかかる調査報告
- ・先進国における最近のウイルス性出血熱輸入例（2008年～2014年）
いずれの事例も二次感染は無し
- ・感染症法制定時の背景
 - ・エボラ出血熱等の新興感染症が世界的に問題となっている
 - ・感染の危険が世界的に問題視されるウイルス性出血熱等への十分な対応が図られていない
 - ・ウイルス性出血熱や原因不明の感染症に対しても安全で安心して対応できる医療体制の確保が求められる
- ・第一種感染症指定医療機関
院内（職業）感染防止をはかりながら、一類感染症の患者に医療を提供する施設。
当センターと厚生労働科学研究費補助金研究班（研究代表：加藤）は研修会や診療の手引きの整備などを行ってきた

***セミナーの様子**



話題 2 「日本の医療機関における新興感染症への備え」：大曲貴夫国際感染症センター長

①国立国際医療研究センター国際感染症センター（DCC）の歴史と設立の目的について

②DCC の組織とそれぞれの役割について

【国際感染症対策室】

情報収集、人材育成、他の医療機関の支援、未承認治療薬の供給などを行う

・国際感染症に関する医療者等への様々な情報発信・学習支援の取組みを紹介

【トラベルクリニック】

渡航前の備え、リスク評価、ワクチン接種、予防内服などを行う

【感染症内科】

帰国後体調不良への対応、多剤耐性菌等への備えを行う

③感染症病棟について

当センター病院は全国で3カ所8床ある特定感染症指定医療機関の1つ（4床）に指定されている（平成25年4月1日現在）

④医療者訓練風景の紹介（ID Conference）

*セミナーの様子

